

新連載 麻薬現代史 近代世界を動かした物質



ふじの・あきら 一九五一年、山口生まれ。一九八〇年に国連に採用され、国際麻薬規制に携わる。国際麻薬統制委員会（INCB）事務局次長、国連薬物・犯罪事務所（UNODC）東アジア・太平洋地域センター代表、UNODC 事務局長特別顧問など歴任。

上—中国で作られたポスター。人物は中国を象徴し、国内生産のアヘン（大きい蛇）と輸入された麻薬（小さい蛇）により緊縛されている。
下—初めて開催された国際阿片会議に集まった各国の代表団。

世界 SEKAI 2019.1

一九〇九年（明治四十二年）二月、列強諸国の租借する「租界」があった上海で、麻薬に関する世界で初めての政府間会議が開かれた。国際麻薬規制の始まりである。日本を含む十三カ国が参加して、今日に至る長く困難きわまる道のりへの第一歩が踏み出された。

歴史とは手漕ぎボートのようなものだ、といつか教わった。船を漕ぐように後ろを見据えつつ進まなければ、目指すべき方向も定められないし、真っ直ぐに進むこともできないのだと。麻薬規制も同じである。今日、麻薬の合法化をめぐる無責任な議論が、世界で、また日本でも、ときには声高に、語られることがある。一世紀余り前に先人たちが築いた道筋を、我々は見失ってはならない。だから、この稿を起こした。

ひとつ例をあげる。いわゆる合法化議論の中には、人体や精神への影響を検証するのではなく、「犯罪組織が得ている莫大な不法収益を防ぐため、国が限定販売をすればよい」という意見がある。

しかし、そもそも身体的・精神的依存を生じさせる薬物を、医療以外の目的で国家が国民に供与してはならないのだ。規制を緩めてしまえば、歴史の示す通り、犯罪組織は新たな市場を作り出し、新しい買手を見つけることになる。そのなかに読者の家族や友人が含まれるとしたら、他人事ではないはずだ。

麻薬は、規制されているから危ないのではない。危ないか

ら規制されているのだ。ただ規制を外すことは、結局誰のためにもなりはしない。犯罪組織を潤すことを除いては。

いつの時代でも、どんな物が対象であれ、密輸を企てる犯罪組織は、必ず抜け穴を見つけてきた。規制の弱い国が標的になるのは、歴史の示すところである。沢山の事例がある。そして歴史は繰り返すのだ。

私は国連職員として、三〇年余りを国際薬物規制に携わった。ウィーンに通算二五年、その間バンコクに五年ほど赴任し、世界の国々の三分の一にすぎないが七〇カ国ばかりを訪れる機会を得た。それぞれの首都、地方の街、また辺境の地で、現場を見てきた。この連載では、国連職員と各国の人々とは織りなした物語を軸に、また一〇〇年前の各国の公文書や、麻薬密輸を企てる人物らがヨーロッパと極東の間で取り交わした手紙などを掘り起こして、稿を進める。

そもそもは、英国公文書館で一九〇〇年代初頭の文書を読んだのが始まりであった。英国内務省の機密文書などには、時に一〇〇年間非公開というものさえあり、中身を見ることはかなわなかった。しかし当時、国境を越えた合同捜査は外交ルートを使ったはずだから、英国外務省のファイルに当たってみた。こちらは数十年で公開されたものも多く、機密内容も知ることができた。

日本側の状況は、まず外務省外交史料館で調べてみた。機密指定された外務大臣あての古い報告書などは、丁寧な筆書

きでしたためてあった。

この連載では、一世紀あまりの間に麻薬をめぐる世界で起きた事柄を軸に、麻薬の現代史を語る。麻薬規制の国際条約体制がどう始まって、どの様に進化してきたか、今日の世界で何が起きているのかを、読者諸賢にはまず知ってもらいたい。過去にあった事実を知ることによってのみ、我々は船の進むべき方向を決め得るのだから。

国際問題だった麻薬

麻薬は、医療と研究用にはなくてはならない。国際社会は、世界での医療麻薬の需要と供給のバランスを取り、必要量を確保しようとするともに、麻薬の横流し、密輸と密造、そして乱用とたたかってきた。

世界で合法的な麻薬の需要がモルヒネに換算して三三三トンほどであった一世紀前、製薬会社が製造した麻薬は一〇〇トンを超えていた。大部分が非合法的なルートへ横流しされ、世界各地へ密輸されていた。文書偽造なども多く見られ、すでに犯罪組織の存在がうかがえる。

麻薬乱用とのたたかいと、人類のために合法的に利用しようとしてきた努力が、この一〇〇年余りの国際麻薬規制の歴史である。そもそも麻薬問題とは国際問題であったから、一九〇〇年台初頭より諸国が、その体制の違いにかかわらず、今日まで一致協力して対処してきた。

一九〇九年二月一日、月曜日、午前一二時。世界で初めて麻薬規制のために「国際阿片会議」が始まった。晴れた朝ではあっても、二月の上海は例年通りの寒さだったに違いない。会議が行われたのは、列強諸国の租借していた居留地「租界」にある外灘（バンド）沿いの匯中飯店においてであった。当時最も壮麗なホテルと言われた。

匯中飯店はアメリカ人経営で、英語名をパレスホテルといった。その建物は今「和平飯店」と呼ばれて、まだ外灘に建つ。壁には、一世紀前に世界最初の国際麻薬規制会議が開かれたことを示す記念碑が埋め込まれている。一〇〇年後、上海で開かれた記念碑が埋め込まれている。私もそこに居合わせた。我々が当時の上海市長に碑の設置を提案したのだ。二月一日、冬の朝陽が外灘にあたり始める頃、多くの市民が匯中飯店前にやって来て、国内外の代表らが次々と到着する様子を興奮して見物した、と当時の記録にある。

会議は二月一日から二六日まで続いた。参加したのは、アメリカ、中国、フランス、ドイツ、イギリス（英領インドを含む）、日本、オランダ、ポルトガル、ロシア、シヤム（現在のタイ王国）、ベルシャ（現在のイラン）、オーストリア・ハンガリー（一つの帝国であった）、イタリアの二三カ国代表団である。

上海会議では一四回の会合が開かれた。日本からは、高木友枝・台湾総督府医学校長、田原良純・日本衛生試験所所長、大使館の宮岡恒次郎参事官の三名が出席したと記録にある。

スも多い。ひとつ例を挙げる。在東京英国大使館より発信された、ある機密報告である。

「非常に多くの日本人がこの不正取引に関わっており、麻薬の流通に関しては、日本政府により免許を与えられた企業のみが関与することができるようにすることが、不正取引を防ぐ唯一の方策である」

当時、麻薬密輸業者がロンドンと清国のアモイとの間で交わした手紙を掘り起こしたことがある。その一通にこうある。「あなたがT氏に渡した暗号や契約書は全て香港当局に差し押さえられたから、以前の暗号と契約書は破棄して、先々の取引では使わないでもらいたい」「将来用いるための暗号を作成して、できるだけ速やかに送られたし」、続けて、「今後、当方に手紙を送る際には、全て次の住所宛に願いたい。日本国大阪市高麗橋一丁目……」と具体的な住所を指示した内容であった。

また、日本船籍の船がチャーターされて密輸に使われもした。これからわかることが三つある。当時の麻薬密輸には、様々な国の人間が関わっていたこと、多様なルートが使われ、色々な国の港を経由したこと、そして暗号を駆使できる国際犯罪組織がからんでいたことである。日本国籍の人物の関与するケースが、上海阿片会議以降に増加したとみられたのは皮肉であった。この話には続きがある。この連載で次回詳し

国際阿片会議が上海において開かれたのには意義があった。当時、すでに国際犯罪組織が麻薬密輸に絡んでいたが、往々にして上海を経由していたからである。それも外国人居留地である「租界」が使われることが多くあった。

その頃、麻薬の密輸業者らは、例えばヨーロッパで医療用に製薬会社が製造した麻薬を「横流し」した後、あちこちを経由して目的地へ密輸していた。彼らは、密輸ルートをいとも簡単に変更できた。連中はさまざまな国で活動し、それは往々にして自分自身の国ではなかった。

彼らは、汚職官吏に自在に賄賂を渡せた。麻薬密輸の全ては、すでに高度に組織化され、巧妙な隠蔽方法、文書偽造、暗号による通信などを駆使していた。日本人が関与したケー



国際阿片会議出席日本代表より小村寿太郎外務大臣宛の機密報告書

く触れるはずである。

上海阿片会議では、参加各国からそれぞれの国内状況について報告がなされ、討議が行われた。アヘンのみならず、それから取れるモルヒネ、さらにはコカインについての国際規制も議論された。

しかし、アヘンについては、当時その用途があいまいであったために、世界で初めてのこの会議は、試行錯誤した様子がある。

アヘンやモルヒネの輸出は税収に関わっていたし、阿片戦争以前より続く中国国内でのアヘン乱用をやめるとしても、これは漸進的にせざるを得なかった。そもそも「租界」自体に、多くの「煙館」と呼ばれるアヘンを吸入する場所が提供され、あたかも社交場として機能していたのであった。

参加諸国は、漸進的なアヘン取引の禁止、自国法規の再検討、特に仕出し国を含む、それぞれの国の領土での麻薬密輸の取り締まり、アヘンのみならず、モルヒネの製造・販売・流通の制限と取り締まり、麻薬の学術的研究の必要性、「租界」における煙館廃止、などを提案して、会議を終了した。

上海での国際阿片会議の結果を踏まえ、一九一二年にオランダのハーグで麻薬を規制する初めての条約が採択された。「万国阿片条約」である。しかし、進化を始めたばかりとも言えるこの条約では、各国全てが必ず取らなければならない手段までは盛り込まれはしなかった。だから、密輸の企ては

直ちには防ぎ得なかったのだ。

締約国に対して法的拘束力を持つ、つまりどの国もが行わなければならない規定を備えた条約を国際社会が手に入れるには、一九二五年まで待たなければならなかった。こうして、麻薬規制のための条約体制は徐々に、しかし確実に、進化を始めた。

どんな麻薬が乱用されてきたのか

国際規制される薬物には大変多くの種類がある。繰り返すが、麻薬、またその他の規制薬物は、医療・研究用には不可欠である。これは確保しなければならない。それを踏まえつつ、乱用されてきた薬物について語る。

麻薬には、植物由来のものと、全く化学的に合成されるものがある。現在、我が国で乱用されている薬物で最も問題が大きいのはいわゆる覚醒剤であるが、これまでの話の流れから、ここではまず植物由来の麻薬について、それも特に「アヘン系麻薬」から話を始める。

■アヘン系麻薬

アヘンはケシから取れる。ケシの仲間にはさまざまなものがあるが、人間の役にも立ち、乱用もされてきたアヘンを生み出すのは、ソムニフェルム種だけである。我が国では、これ以外にもアツミゲシ(セティゲルム種)とハカマオニゲシ(ブラクタアツム種)は植えることも禁止されている。

既に一九世紀末にはコカインがヨーロッパで広まっていて、その危険性も知られていたことがわかる。

コカインは、コカの木葉を用いて作られる。コカインも前述のヘロインのように一九世紀末にドイツで単体分離された。局所麻酔薬であり、興奮剤でもある。日本へも密輸入されてきたが、覚醒剤ほどには蔓延してこなかった。

ヘロインと同じく、コカインも精製する過程で、ある化学物質が不可欠である。純度を高めるためだ。最も好まれるのは「過マンガン酸カリウム」という。これをコカベーストに注いでいけば、その「紫色」が消えるときがくる。そこで止めさえすれば純度の高いコカインが生成される。化学の知識がなくとも使える。

ということは、この過マンガン酸カリウムを押さえれば、コカインを密造しようとする連中の儲けを妨げることができ。ここでも、国連の我々のチームが主導した「オペレーション・パール」が始まった。この連載で後に詳しく語るが、コロンビアの担当官が身の危険を感じて、姿を隠さなければならなかったほどであった。

■大麻

もうひとつ植物由来の、というより植物そのものである、大麻について触れる。マリファナとも呼ばれる。「ハシシーシュ」と言う場合には、大麻樹脂を指すことが多い。暗殺者を意味する英語の「アサシン」という単語は、「ハシシーシュを

アヘンはこう作られる。ソムニフェルム種のケシをつける「ケシ坊主」と呼ばれるカプセル様の果実に傷をつけ、染み出してくる液を採取したのがアヘンである。集めて乾かすと、独特の匂いを持つ黒色の塊となる。

このアヘンに、約一〇パーセントのモルヒネが含まれる。モルヒネは鎮痛剤として今日も不可欠である。

モルヒネからヘロインもできる。ヘロインというのは、もともとは商品名であった。ドイツの製薬会社が一九世紀末に製造・販売した。発売当初はモルヒネに代わる、依存性を持たないものとしていた。だが後に、より強い依存性と禁断症状が現れることが判明した。今日、アヘン系の麻薬ではヘロインが世界中で最も乱用されている。

ただ、その不正な供給を断つのに方法はあるのだ。ケシの非合法栽培を減少させることに加え(これは難しい)、ヘロインを製造するために重要な化学物質(「無水酢酸」という)が密造者の手に渡るのを防げば良いのだ。国連がこの観点からイニシヤティブをとった「オペレーション・トパーズ」については、後にこの連載で詳しく触れる。

■コカイン

植物由来の麻薬にコカインもある。

アーサー・コナン・ドイルは一八九〇年に書いたシャーロック・ホームズ第二作「四つの署名」で、ホームズがコカインを使用し、ワトソン博士に強くたしなめられる場面を描い

「食す者」という意味のアラビア語からくる中世ラテン語が語源だとされる。大麻の人間の精神へ与える影響が古くから認識されていたことであろう。

いわゆる合法化の議論がかまびすしいのは、ことに大麻に関してである。本末転倒の議論のことは、まえがきにも書いた通りだ。もしもだが、大麻が人体に悪影響を与えないことが立証されれば、国際条約上でも国内法上でも、規制の対象から外す手立ては備わっている。しかしそれは科学的に検証されるべきものである。住民投票や国民投票で決められる筋合いのものではない。ある病気の治療にどのような薬が効くか効かないかを、国民投票で決めたりするであろうか。

■覚醒剤と向精神薬

こういった植物由来の麻薬以外に、化学的に合成されるものがたくさんある。条約上、麻薬に分類されたり、向精神薬というものになったりする。ここでは、そのなかでもアンフェタミン系覚醒剤という一群を取り上げる。今日、世界でそして日本で、最も脅威をもたらしているからである。

この中には、覚醒作用ゆえに乱用される、アンフェタミンとかメタンフェタミン(これが我が国で乱用される)や、幻覚作用があるMDMA「エクスタシー」がある。もともと、密造や密輸をする連中は、勝手な名前をつけるのであって、「エクスタシー」と呼ばれていても、何が入っているのかはわかったものではない。

このアンフェタミン系覚醒剤の一群も、それを密造するには化学物質が要る。特に、原料となる前駆物質である。前駆物質の規制のためにも国際オペレーション「プロジェクト・プリズム」が開始され、国連の私のチームの出番があった。

■危険ドラッグ
日本では最近こう呼ばれるものについても話しておかねばならない。「脱法ハーブ」などとも言われた。それは語弊があることわざまらない用語であった。法律の規制にかかっていないから大丈夫だ、と勘違いする者たちが多く現れたからである。とんでもない話である。

規制されている薬物の、特に覚醒剤だが、化学構造をちょっと変えて、わけのわからないハーブなるものと一緒にしただけなので、誰もその危険の度合いなど知らないのだった。危険だから規制されているものが、その構造をいじったからといって危険でなくなるわけがなかった。何が入っているかわからないから、造った連中も、密輸した輩も、販売した店も、使った人間たちも、誰としてどれくらい危ないかは知らない。そして死に至ることさえあったのは報道されている通りである。

麻薬はどこで作られているのか

では、こういった非法法の麻薬やら覚醒剤その他は、いったいどこで作られてきたのか。これに答えるのは簡単ではない。

我々のいう「持続しうる代替開発」によって黄金の三角地帯では、四半世紀あまりを経てかなり減少した。今は亡き、先のタイ国王陛下と王太后陛下のご尽力も極めて大きい。

「黄金の三日月地帯」と言われる地域もある。アフガニスタン、イラン、パキスタンの国境地帯である。最大の問題はアフガニスタンの現況である。

アフガニスタンでは二〇一七年、不法なケシ栽培が前年の二倍近く増えた。UNODCの現地調査によると三二万八〇〇〇ヘクタールに達したが、これは東京都全部の面積の一倍半である。非合法アヘンの産出量は九〇〇〇トンにも昇り、世界の「医療用」アヘン系麻薬需要の五倍近くになる。

中南米でも不正栽培は見られる。ペルーからコロンビアのアンデス山脈のあたり、また中米メキシコからグアテマラにかけてである。国境を越えたアメリカへのヘロイン密輸入の大部分が、メキシコからと報告されている。

■コカイン

コカインはコカの葉から造られる。南米のコロンビア、ペルー、ボリビアで密造されてきた。

視察のためコロンビアの奥地に飛んだことがある。輸送機を改造した双発のプロペラ機でかなりの山岳地帯まで飛び、着陸したのは武装警官隊の基地であった。警官隊の訓練が行われる中、大型ヘリコプターに乗り換えて、さらに奥地まで飛んだ。

い。この連載で後に出てくる物語につながるスケッチを描いておきたい。

■アヘン系麻薬

「黄金の三角地帯」と呼ばれる場所がある。タイ、ラオス、ミャンマーの国境が交差するあたり一帯の山岳地帯である。ここで長年、ケシが不法栽培されアヘンが生産されてきた。しかし、儲けていたのは彼ら山岳民族ではなく、採取されたアヘンをヘロインに変えて密輸する連中であつた。一般の農民自体が貧しく、山岳民族の農民たちはさらに貧しかった。かろうじて食べていくため、やむなくケシの栽培をしていたのみだ。合法的に生計を立てる道が他にありさえすれば、不法なケシ栽培などに手を染めなくとも良かった。

岩波ジュニア新書

〈超・多国籍学校〉は今日も

にぎやか！—多文化共生って何だろう

菊池 聡

本体200円(税別)

さまざまな国の言葉が貼り出された昇降口、多文化を意識した華やかな運動会、習熟度別の少人数クラス…。外国籍または外国にルーツをもつ子どもが多く通う小学校で長く国際教室を担当してきた著者が多文化共生のあり方を語る。

岩波書店

到着してみれば、すでに武装警官隊が展開し、広範囲に栽培されていたコカの木を山刀で切り払っているところであつた。上空には、二機の小型ヘリコプターが機関銃を外に突き出して警戒にあたっていた。彼らは非常に緊張していた。反政府ゲリラの支配下にある地域だったからである。警官隊のそばをひとりの女性がすり抜けていった。表情までを読み取ることができる距離ではなかったが、その村人が生計を立てる道を奪われ、諦めの境地にいるのは容易に想像できた。

ゲリラの支配下にあるこの山奥では、前述の「代替開発」を中央政府が行うのは非常に難しかった。現在のアフガニスタンの状況と同じである。コカインが密造されるのはこういった場所である。

しかし、二〇〇六年九月、コロンビア政府と同国の左翼ゲリラ組織「コロンビア革命軍(FARC)」は歴史的な和平協定に署名した。特に持続可能な代替開発に関して、今後の展開が望まれる。

■大麻

これはどこにも生える。私がウィーンに勤務していた頃、テニスクラブのゲートの裏に自生しているのを見つけたことさえある。

インドネシアのアチエ州では発見された大麻の不正栽培を視察したことがある。かなりの奥地であつた。上空から見てもすぐに発見されないよう、バナナのプランテーションに見

せかけてあった。

私がアチエ州に出張したのは、中央政府とアチエ州の自由アチエ運動(G.A.M.)が二〇〇五年八月、ヘルシンキで和平合意に達したその少し後のことであった。それにより、代替開発のプロジェクトを検討したいとの依頼が中央政府から国連へきたのだ。

その頃、アチエでは大麻の密栽培が武器などの調達にもつながっているとも伝えられた。その真偽は別として、大麻が大きな収入源になるという認識があったのであろう。

また、日本においても、世界の他の国々と同じく不法栽培のケースは後を絶たない。インターネット上で、大麻は有害ではないとの誤った情報が溢れていることも背景にあるだろう。

■覚醒剤と向精神薬

アンフェタミン系覚醒剤のことは触れた。一九世紀末、そのうちのアンフェタミンはドイツで、メタンフェタミンは日本で、初めて合成された。

第二次世界大戦後、日本では薬局で「ヒロポン」などの名で販売されていた。その危険性が明らかにになり、市販が禁止された後は、国内で密造があった。その後アジアでは、香港、台湾、韓国などで順繰りに、取り締まりの網をくぐって製造され、いちごっこをしているような印象であった。一九八〇年代では中国に場面が移った。世界の他の地域に目を向け

れば、北米、そしてヨーロッパで、覚醒剤の密造がはびこり始めていた。

しかし今日、覚醒剤はどこでも密造される。原料の「前駆物質」を手に入れることさえできれば。

南太平洋の島国フィジーで覚醒剤密造工場が摘発されたことがある。その時点で世界最大規模であった。原料となる「前駆物質」はこの国にはないし、できた覚醒剤も他の国に密輸しなければいけないのだから、この国での大規模な密造など想像していなかった。

インドネシアでもこれまで大規模の密造工場が摘発された。同国へ出張する直前に報告されたから、視察に行った。ヨーロッパとアジアの何カ国もの人物らが関与していた。ヨーロッパとアジア太平洋地域諸国による合同捜査の結果であった。メタンフェタミンとエクスタシーの両方を密造しようとする、「007」の映画に出てきそうな工場であった。

カンボジアでも二〇一〇年に初めて覚醒剤の密造工場(ほぼ掘って小屋であった)が摘発された。今、アフリカ各地で覚醒剤の密造工場の摘発が続く。そこで造られているのは、高品質の覚醒剤なのだ。日本などが狙われている。

新たな密造の場所ができれば、そこで乱用が始まる。新たな密輸ルートができる。そのルートにそってさらに乱用が起こる。歴史の示す通りである。次回は、それぞれの話の続きを語ることになる。